

近現代における奄美島唄の伝承の変遷に関する研究

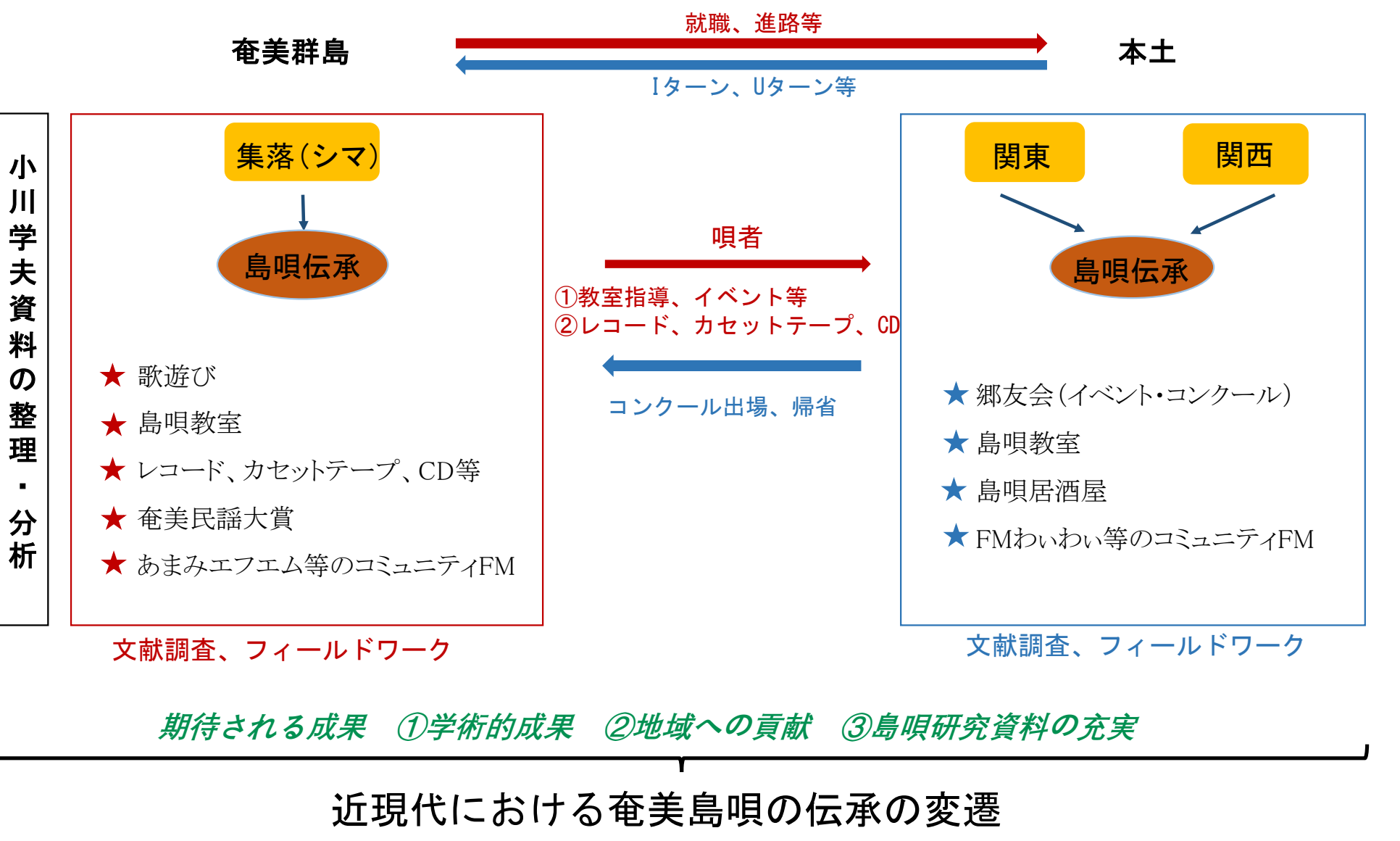
梁川英俊（鹿児島大学法文学部多元地域文化コース教授）アンニ（人文社会科学研究科地域政策科学専攻博士後期課程3年）

はじめに

本プロジェクトは、近現代における奄美島唄の伝承について、奄美群島と本土という二つの観点から調査研究を行うことを目的とする。

今日奄美文化の表看板とも言えるべき芸能である島唄の伝承は、1960年代から伝統的な「シマ＝集落」の歌遊びではなく、ラジオ、コード、カセットテープ、CD等の放送メディア、島唄教室、ネット等が中心となっている。

本プロジェクトでは、この島唄の伝承の変遷を歴史的資料に基づいて検証するとともに、群島内および本土の2つの視点からフィールドワークを行うことによってその現状を分析する。以下、簡単に図示する。



島唄の伝承活動に関する詳細な調査・研究は、奄美群島の近現代史のみならず、その本土との関係を明らかにすることにもつながる。その点で、「『鹿児島近現代』教育研究拠点整備事業」の主旨とも直結すると考える。

プロジェクト内容 (1)

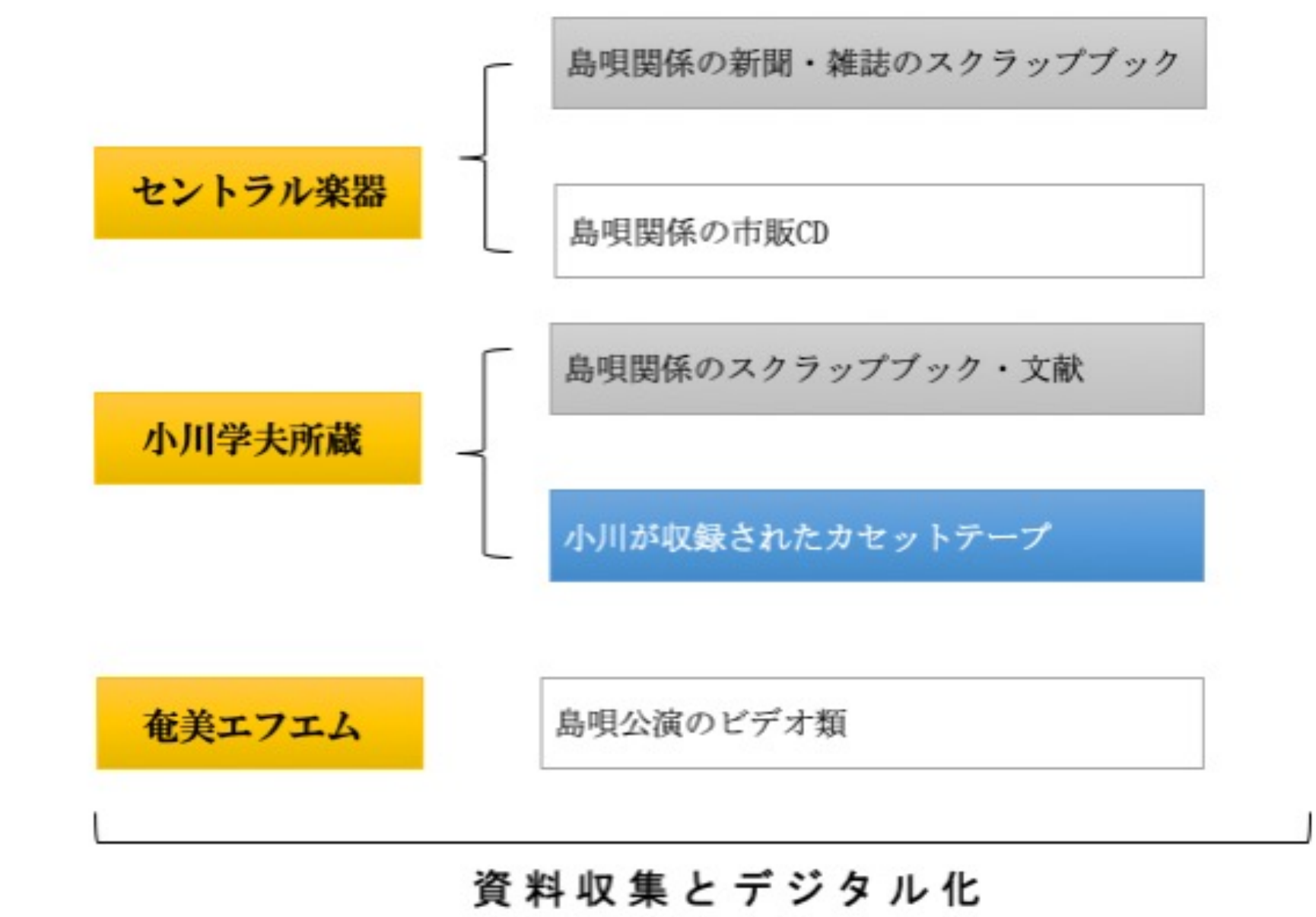
資料収集や音源のデジタル化

本プロジェクトにおける資料の提供元は、以下の会社、法人および個人である。

①大島と徳之島に店舗を構える「(株)セントラル楽器」が所蔵する昭和30年代からの新聞・雑誌のスクラップブック。

②奄美大島のラジオ局「あまみエフエム」から提供されたビデオ類。

③1960年代から奄美島唄の研究・調査を行っている島唄研究家・小川学夫氏（鹿児島純心女子短期大学名誉教授・南海文化賞および南日本文化賞受賞者）から譲渡された島唄関係のスクラップブックや文献、およびカセットテープ等の音資料。



上図の通り、本プロジェクトは、主として昭和30年代から今日までの奄美島唄に関する資料を収集することによって、近現代の奄美島唄の全般的な変遷の歴史を明らかにすることを目的としている。

青色で示された小川による譲渡された資料は、氏が島唄の研究を始めた1960年代から40年間にわたって島唄の公演や歌遊び等、さまざまな機会に録音した音源である。これらの資料は、奄美島唄の貴重な歴史的資料であると同時に、島唄の演奏様式の変容等の音楽学的研究にも資するものである。

分類	時期	録音名
コンクール	1978年	1978年第4回奄美民謡新人大会(予選)1、2、3、4
	1979年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1980年	1980年第 四回奄美まつり民謡大会(予選)1、2
	1980年	第四回奄美まつり民謡大会大会
	1983年4月23日	1983年民謡大賞5、6
	1977年	奄美民謡大賞A、B
	1977年、1978年	奄美民謡大賞を個人で、武下和幸・名瀬・松金敏
	1978年12月4日	1978年12月4日小島美子音楽発表 奄美民謡公演AB
	1980年11月8日	東洋音楽学会定期研究会・内田り子・奄美の民謡・東京芸大にて
	1980年11月11日	シタロロ展(宮城野宮)・世太民謡部・町田武彦、村止コッ
取材録音	1988年11月17日	青山歌謡(1988年11月17日) (1) (2)
	1988年11月23日	吉田和幸歌謡(1988年11月23日) (1) (2)
	1988年11月23日	徳之島の唄 1988年11月23日 伊藤嘉穂先生宅録音(1) no. 1AB
	1988年11月23日	徳之島の唄 1988年11月23日 伊藤嘉穂先生宅録音(2) no. 1AB
	時期不明	徳之島の唄 AB
	時期不明	徳之島の唄 AB
	時期不明	徳之島の唄 AB
	時期不明	徳之島の唄 AB
	時期不明	徳之島の唄 AB
	時期不明	徳之島の唄 AB
コンサート	1977年	1977年第一回島唄の夕べ AB 野山・奄美
	1977年9月17日	徳之島の唄・島唄・奄美民謡の競演A、B
	1978年	SS3 徳之島の唄・島唄・奄美民謡の競演A、B
	1978年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1978年8月	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1980年10月21日	奄美民謡大賞を個人で、武下和幸・名瀬・松金敏
	1988年11月23日	徳之島の唄 1988年11月23日 伊藤嘉穂先生宅録音(1) no. 1AB
	1988年11月23日	徳之島の唄 1988年11月23日 伊藤嘉穂先生宅録音(2) no. 1AB
	1988年11月23日	徳之島の唄 1988年11月23日 伊藤嘉穂先生宅録音(3) no. 1AB
	1988年11月23日	徳之島の唄 1988年11月23日 伊藤嘉穂先生宅録音(4) no. 1AB
島唄シングル	1982年10月	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
	1982年	第三回奄美まつり民謡大会S54、S55
FM	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統
	1990年6月6日	竹内勉民謡 1990年6月6日 16:05～ 数え系統

小川音源資料の抜粋

灰色で示されたように、本プロジェクトでは、数多い新聞記事を時間順にエクセルに整理し、また小川が南海日日新聞で発表された記事の一部は、手入力によりワード文書として残した。

時期	表記	分類	発行源	タイトル
19600301	OSC1338	レコード	みどり通信	奄美の新民謡約十曲の新しいレコード 近く発売
19600305	OSC1338	レコード	南海日日	沖縄民謡レコード・各種入荷しました・セントラル楽器店
19730819	OSC03404	コンクール	南海日日	デビッ子大熱演・島唄大会大賑わい
19740815	OSC03408	個人文・島村統一	南海日日	武下和幸の10年その豊かな音楽：祝唄集をきく上
19740817	OSC03410	個人文・島村統一	南海日日	武下和幸の10年その豊かな音楽：祝唄集をきく下
19740830	OSC03412	個人文・村田有佳	南海日日	私考奄美の方言音
19750202	OSC03438	個人文・島村統一	南海日日	土俗のうたげ・唄遊びに暮る島の血上
19750204	OSC03440	個人文・島村統一	南海日日	土俗のうたげ・唄遊びに暮る島の血中
19760113	OSC03423	座談会	南海日日	島唄：いまとむかし・戦前も民謡大会、レコード化、大正時代に
19760114	OSC03430	座談会	南海日日	島唄：いまとむかし・分庵中の暮らしに希望

小川、セントラル楽器新聞資料の抜粋

プロジェクト内容 (2)

島内、本土の島唄教室についての取材

本プロジェクトでは、奄美大島の島唄教室や、関西奄美会、関西の島唄教室、島唄居酒屋等においてインタビュー調査等を行い、本土在住の奄美出身者における島唄伝承の変遷や現状について調査・分析した。

かつては集落の唄遊びで自然に継承されていた島唄の伝承は、1960年代後半から島唄教室が中心となっている。集落における自然な伝承が消失した今日、島唄教室は島唄の伝承のためのほぼ唯一の場である。

本土には関東や関西を中心に多くの奄美出身者がおり、郷友会等の組織により緊密な結びつきが保たれている。島唄教室も多く存在し、奄美出身者はもとより本土出身の受講者も多い。島唄は郷友会関係の種々のイベントにおいても欠かすことのできない要素である。

本調査における取材の日程や内容は以下の通りである。

本土	奄美大島
2022年11月12日～11月15日 尼崎 ①太原俊成民謡教室 積古見学、生徒へのインタビュー調査 ②上村摩枝民謡教室 唯子方・弟子の田中真由美へのインタビュー調査 ③森民和会島唄・三味線教室 主宰者の昇喜代子、昇和美へのインタビュー調査 ④榮百々代三味線教室 積古見学、主宰者の榮へのインタビュー調査	2023年3月26日～3月28日 奄美大島 奄美ちん三味線製作所・教室 主宰者の昇喜代子、昇和美へのインタビュー調査 *本調査は、令和3年度の地域政策科学専攻研究活性化プロジェクトの「奄美群島における島唄教室の現状とその伝承方法に関する調査」における教室調査の継続である。

島内、本土の島唄教室への取材



取材の風景(抜粋)

上述の調査においては、各教室の沿革、指導法、練習法について取材した。その際、歌詞集、三味線譜等の提供を受けたことを感謝したい。

結論・成果

1) 学術的結論

本土の島唄教室を対象とした調査では、実際に練習に立ち会えたのは、関西の太原俊成民謡教室の一件だけであったが、関係者からの話を総合すると、関西には群島内の教室のようにコンクールの出場を目指す教室はほぼなく、歌う場も郷友会等における発表会に限られているとのことであった。歌われる唄も師匠の唄の継承という側面が強い。

また、生徒も奄美一世が多く、二世は珍しい。三世はほとんど参加していない。教室の師匠は多くが故人となっており、教室はその記憶を共有する生徒によって支えられているという印象が強く、継承という点では多くの問題があることが分かった。

2) 地元への貢献

今夏出版予定の梁川の著書『「かずみ」の時代：唄者西和美と昭和、平成、令和の奄美島唄』（南方新社近刊）が、ラジオ・新聞等の報道によって、すでに数百冊の予約を獲得しており、本プロジェクトによる重要な地元への貢献として数えられる。

また本プロジェクトの成果は、曲阜師範大学のオンラインセミナーや珍島アカデミック・ソサエティの主催による国際シンポジウムにおいて、中国や韓国の研究者や学生の関心も惹いており、本学との学術協定や学生の留学等における今後の効果が期待される。

3) 島唄研究資料の充実

小川学夫氏から譲渡された録音資料を整理・分析してデジタルアーカイブを構築した。資料全体の分析は今後の課題であるが、歴史的に貴重な録音が多く、将来的に奄美の島唄文化の貴重な歴史的記録として研究者にとって重要な資料になるはずである。